



寢床屋の無料配布

• JUNJUN, #555555 3

良く晴れた日だ。中天から降り注ぐ陽射しに摩尼珠をかざすと、薄い乳白色にキラキラと虹色が輝く。それが地面に落ちて、土の上にも七色が降り注いだ。

「きらきらしておるの」

「きらきら、ぴかぴか、くらくらするの」

小鬼は美しく乱舞する光を飽きずに見つめる。ひよいと掬えば掌に目映い輝きを持つてゐるような気がした。

「小童こわっば、取ってくりやれ」

「きらきら、取ってくりやれ」

そういつて小鬼が傍らを振り向いたが、小童と呼びかけた相手はすうすうと寝息を立てて床几の上で寝ていた。人の手のひらに乗ってしまうほどの背丈しかない小鬼だ。ふう、と少年の洩らす寝息にハタハタと腰布と髪の毛がはためく。

「茂吉しげきちは寝てしまったようじゃの」

隣の床机に座った隠居爺さんが、小鬼に向かって言う。

「なんじゃ、寝よったか」

「すうすう、寝よったか」

キラキラを取って欲しかった小鬼は、ちよつとがっかりする。

「天狗のお山の修行が厳しいのじやろうて。父親の龍王が居れば力のことも判つていようが、何も知らぬでは力があつても使うのは容易ではない」

爺さんがそう言うのと、小鬼はふるふる震えた。

「修行か。それは厳しいの」

「お山の修行はこりごりじゃ。おお、思い出しただけでぞわぞわするわい」

「ぞわぞわ、こわこわ、こりごりじゃ」

小鬼はそう言つて、もう一つ身体を震わせた。

お江戸は公方様がおわす千代田のお城から、東にちよいとはずれた町家の片隅。何の因果かここは人ならざる住民が集まる裏長屋だ。座敷女中の化け猫に、門付けのろくろ首、易者のためきに古傘買いの河童。茂吉の母である蛟。大家は獺で、その獺にご執心の座敷童。人など隠居爺さんしかいない。この長屋では色々怪異が起こると言

う噂が何故か広まってしまい、結果ご近所からは『お化け長屋』などと言う二つ名ま
で貰っている。

すべては天狗の下で修業し、神通力を持つにいたったキカイセンセイと呼ばれる男
が呼び寄せた縁だ。

小鬼たちはそのキカイセンセイに使役される式神である。

キカイセンセイの用事を済ませる以外は、茂吉がお気に入りでなにかとくつついて
いる。今日は茂吉の大事な摩尼珠を借りて、飽きることなく見ていたのだ。

「きらきらしておるの」

「きらきら、ゆらゆらじゃ」

陽射しが少し傾いて、緑がかった光が落ちた。珠を転がせば、輝きが揺れる。それ
が楽しい。

と、バサバサっ！ と音がしていきなり大きな黒い影が落ちた。ぶお、ぶお、と激
しい風が小鬼に吹き付けた。

「きゃわっ！」

「風が！ 見えぬ！」

吹き倒されそうな勢いに、小鬼が身体を縮こまらせて堪える。だが、一際強い風が小鬼にぶつかる。流石に耐え切れず、小鬼がぱたりぱたと倒れた。

「ひゃあ、なんだったんじゃ」

「ばさばさじゃ、しばしばじゃ。なんだったんじゃ、あの大風は」

ふるふると頭を振って起き上がりながら、バサバサと言う音を追いかけると鳥が長屋の木戸の方へ飛んで行くところだった。

「おのれ鳥！ 小天狗の鬼じゃぞ！ 我等を襲うとは不届きじゃ」

「ふとどき、おののき、おどろきじゃ！」

キカイセンセイが偶にその辺にいる鳥に術をかけて、一時的に使役する時がある。キカイセンセイが気に入ったのか、単にお化け長屋周辺が縄張りなのか。よく見かける尾羽根が荒れた鳥が一羽いるのだ。小鬼は床几の上で飛び跳ねて文句を言う。その声が判っているのか、鳥が木戸の上に止まり、くあー、とバカにしたように鳴いた。

「これこれ、お前たち茂坊の摩尼珠はどうした？」

きいきいと文句を言っていると、隠居爺さんが声を掛けた。はっと床几の上を見ると、摩尼珠がなかった。鳥が探し物はここぞぞ、と言うように、またくあーとバカに

した声で鳴く。

「ややつ！ 烏めが珠を盗りおった！」

「盗りおった、やりおった、やらぬぞ！」

木戸に止まった烏の足元に摩尼珠がきらりと光ったのを見て、また小鬼がきいきいと喚きながらびよんびよんと床几の上で跳ねる。

「ああ、これはいかんわい。烏は光るものが好きじゃからの。しかも摩尼珠じゃ」

隠居爺さんが流石に慌てる。とうの茂吉はまだくうくうと寝ている。よほど疲れているのか。

摩尼珠は龍の持つ珠で、色々言い伝えはあるが何でも願いが叶う、と言うのが有名な説だ。それを狙って、良くない念に憑かれた妖あやかしが茂吉を襲いに来たこともある。

「やい、小童の珠を返しおれ！」

「やい、返せ、やあい！」

小鬼がびよん、びよん、と床机を飛び降りて、木戸の方へ走って行く。烏はそれを暢気に眺めていたが、小鬼が木戸の下までとて、と走ってくるのを見届けると、くあ、くあ、とからかうように鳴いて摩尼珠を掴んだままバサッと翼を広げて飛び立つ

た。

「待て、やい！」

「やい、待て！」

小鬼がいきいきと言うのをチラリと見た鳥が、ぐう、と上昇しようとしたところに、更に大きな鳶が何かエサでも見つけたのか、鳥の真正面からぐあ、とすごい勢いで突っ込んで来た。鳥の方はギャア！ と叫び声のような抗議のような声を上げて、急旋回しようとした。その途端、少し大きめだった摩尼珠が、鳥の足からぼろりと零れた。

「あつ！ 落ちたぞ」

「落ちたぞ、落としたぞ！ やあい、鳥の間抜け！」

小鬼はやんやと歓声を上げた。が、ことんと落ちた先は、表店の屋根の上だった。ころ、ころ、と板葺の屋根の端で、摩尼珠が揺れる。鳥と鳶は、何しやアがる、てめえこそ何しやがんでエ、と言わんばかりにギャア、ギャアと喚きながら、空の上で忙しく争っていた。

「きらきら！」

小鬼は危うく揺れる摩尼珠の行方を固唾を飲んで見守った。今にもころりと落ちそ

うだ。

と、そこへ、足音もさせず猫が屋根の上に現れた。お化け長屋の表店に住む、白地にブチが入ったメス猫だった。

「や、猫じゃ！」

「猫じゃ」

騒ぐ小鬼たちを興味なさげに見下ろして、ふん、とそつぽを向く。そして、屋根の端で危うく均衡を保つ摩尼珠に吸い寄せられていった。

「猫、珠を寄越せ」

「きらきら、寄越せ」

猫はそんな小鬼の言葉も聞き流して、キラキラと光を弾く摩尼珠にちよい、と前足を伸ばした。獲物を玩ぶつもりだったのだろうか、その一手は屋根の端から摩尼珠を押し出してしまった。きら、と光を跳ね返して摩尼珠がころんと落ちる。猫が不機嫌そうに尻尾をしたん、と振った。

「ややや！」

「落ちる」

小鬼が珠を受け止めようと板塀へ走り寄った。摩尼珠はまるで板塀を滑るように落ちてくる。もう少して手が届く、捕まえられる！　と思つた刹那、板塀に打ち付けられた『小便無用』の板にこつん、と摩尼珠が当たつて、明後日の方向へ跳ねた。いきなり摩尼珠を見失つた小鬼たちは、そのまま板塀にべち、とぶつかつてその勢いのまま後ろにひっくり返つた。

「消えたぞ！」

「消えたぞ、パツと、ないぞ！」

目の前に星の散つた小鬼がふらりと立ち上がつて、ふるふる、と頭を振る。そして摩尼珠の行方を追う。

「あつたぞ！　あつちじゃ！」

「あつちだぞ！　きらきら、見つけたぞ」

木戸から裏長屋を出ると、狭いながらも小さな表店が並ぶ通りがある。昼を少し過ぎた通りには人が行き交つていた。その間を縫うように摩尼珠がころころと転がつて行く。小鬼たちも後を追つて走り出す。とて、と人の足元を掻い潜るように走つて、もう少して追いつく、と言う所で、こつん、と重い荷物を背負つた馬の蹄に当たつた。

また摩尼珠が良く判らない方向へ転がった。

「あっ！」

「跳ねたぞ！」

馬の鼻面先を走り抜けると、重たい荷物に疲れ切っているのか、行く手を遮られた不満からか、踏みつぶしてくれる、と言わんばかりにぶふおっ！ と不機嫌そうな鼻息を吹きかけられた。巻き付けた腰布がその勢いではらりと捲れ上がる。一瞬身体もふわりと浮かび上がりそうな強さだった。

「馬っこめ！」

小鬼は文句をつけながら走った。摩尼珠はころころ、と転がって今度は大店の娘と思しき下駄にこつんと当たる。

「オヤ、何か蹴ったようだヨ」

「マア。何も見当たりませんヨウ。小石かのウ」

足元を見回して娘がそう言うのを、荷物を抱えたお付きの乳母も同じく足元を見ながら答える。その足先を小鬼が駆け抜た。摩尼珠は野菜を売る小さな店先へ転がっていく。帳場代わりの長火鉢が乗った店座敷の足元、上がり框の板が割れている。そこ

から出てきたと思しき鼠が、地面へ垂れそうな菜っ葉に惹かれて、鼻を引くつかせていた。そのネズミ目掛けて摩尼珠は転がっていく。

「珠、待て！」

「きらきら、ころころ、ころりん」

小鬼たちが必死に追いかける。鼠が気配に気づいて、転がってくる珠を敵とみるか害がないとみなすか判断しようと、珠の方を向いた。と、そこへ、でっぷりと太ったキジトラ猫がのしのしと近づいてくる。そして振り上げた前足ですかさず鼠を抑え込んだ。じたばたと暴れる鼠。猫が暴れる獲物を玩ぼうとにんまりしたところで、摩尼珠がぼて、と腹にぶつかった。シャーッ！と驚いたのか、邪魔されて怒ったのか、猫が一瞬飛び上がって、すぐに威嚇の声を上げた。鼠は軀が緩んだ瞬間に、すつと板の裂け目へ逃げ込んでしまう。

「おのれら、邪魔をしようたな」

シャー、と威嚇しながら猫が言う。言葉が聞こえる不思議を見れば、しっぽが二股に分かれている。

「ややや、猫又じゃ！」

「猫又じゃ、二股じゃ」

摩尼珠は猫又の足元に転がっている。猫又がふしゅう、と怒りと共に毛を逆立て、収めると一緒に、ころ、ころ、と転がった。最初は気にもしていなかったのに、次第に自分の腹の前でころころと動く摩尼珠に集中力を削がれていく。ついに、ころ、と前足で転がし始めた。そして、何故そう思ったのか判らないが、あぎ、と摩尼珠に噛みつこうとする。だが、いかに猫又が大口を開けようと、珠の方が大きい。しかも、つるりとしている。前足で押さえて噛みつこうとしながら、距離感を誤った後ろ脚がじたばたとしていた。

「おっ母あ、猫」

「アレマア。地面に寝転がってるのウ。またたびでも貰ったのじゃアないかエ」
母子が猫又を見て微笑む。

「旨そうに見えるのかのう」

「うまうま、ころころ」

小鬼は暫く猫又が摩尼珠にかぶりつく様子を、ぽけつと口を開けて見ていた。だが、滑らかな摩尼珠が猫の口と前足から逃れて、つるんつ、と道へ転げ出た。

「転がったぞ」

「うまうま、つるつる、ころころ」

小鬼がまた後を追って駆け出す。猫又も珠の後を追って駆け出した。

「どけえ！」

猫又が小鬼を踏みつぶさんと言わんばかりの勢いで走る。

「ひい。走れ、走れ！ 猫又に食われるぞ」

「あわあわあわ」

小鬼もその迫力が恐ろしくて、必死に走った。摩尼珠を追いかけているのか、猫又から逃げているのかも判らないくらいだ。摩尼珠は駕籠かき、棒手振り、小さな店へ買い物に來た奥向き女中や、仕事場へ向かうらしき男女、大八車を押す男たち、荷馬を引く馬子、参勤交代で江戸詰めになった侍たちが物珍し気に歩き回る埃っぽい通りをコロコロと転がっていく。

草鞋を履いた太い脚、あでやかな着物の裾と下駄。袴の縞模様と白い足袋に草履、大きな木の車輪、毛だらけの馬の脚とつやつやの蹄が小鬼たちの目の前を横切っては視界から消えた。

そして、堀沿いの通りに転がり出た。堀には人を乗せた猪牙、荷物を積んだ平船などが忙しく行き交っている。

「さあさあお立会い。ご用とお急ぎでない方は、よつていらっしやい。その旦那、耳の穴かっぼじつてようく聞いつくんナ」

堀端の柳の下に、木箱を置いて男が一人立つ。そして細長い棒を、反対の手には紙束を持って大声で喋り始める。読売屋だ。何事だと行き交う人たちが男の方を向いて、歩を緩めた。摩尼珠はその足を転がって、読売の立つ木箱にこつん、とぶつかってまた方向を変えた。

「あつ！」

「ころころ！」

跳ねて転がった珠は、このまま進めば堀に落ちてしまう。猫又も後を追ってきたが、人の脚がざざっと集まって目の前を塞ぐのに苛立って追うのを諦めた。だが、小鬼たちは諦めるわけには行かない。必死に駆けて摩尼珠に追いつこうとする。通りの端は堀を保つ石積みが見えている。箱にぶつかった勢いで転がった摩尼珠は、ほんの少し上向きに傾斜が付いた石垣からぼおん、と宙へ放り出された。小鬼たちも後を追って

飛び出し、何とか空中で摩尼珠を捕まえることが出来た。

ほっとしたのも束の間、ふわりと浮いていたのが急速に下へ引っ張られる。

「ややや！」

「落ちる、落ちた、落ちつくぞ」

摩尼珠だけは離すまいと二人で抱えているが、水の中に入ったらどうなるか判らない。万事休す、と目を瞑った。

「なにをやっておる」

そんな声と共に急に落下が止まったかと思うと、ふわりと身体が浮いた。水に落ちる、もう落ちる、今か今かときゅつと目を瞑っていた小鬼は恐る恐る目を開く。

「式じゃ」

「式じゃ、童わっぱじゃ」

すぐ近くの橋の欄干に、白い水干と鬢姿の童子が腰かけて居た。キカイセンセイの使う式神の一つだ。ふわりと不思議な力で小鬼を捕えて、橋の上におろしてくれる。

「あの坊主の摩尼珠ではないか」

小鬼たちが抱えていた珠を見て、童子が勝手に持ち出したのかと言う疑いの眼差し

でじろりと小鬼たちをねめつける。

「小童から借りたのじゃ」

「借りた、きらきら、借りたのじゃ」

小鬼たちが言い募る。

「烏が横から掠め取って行きおったのじゃ」

「烏が、烏め、掠め取った」

キイキイと小鬼が童子に訴える。自分たちはそれを取り返しに来たのだ。

「くだらぬ。小天狗に怒られたくなきや、大人しくしておけ」

そう言った時だった。ざあつ！ と風を切る音がして黒い影が小鬼たちの傍を飛び去って行った。

「きやあ！」

「うわ！」

橋の上には、往来の男女の他、羅宇屋、油売り、鑄掛屋などが欄干に沿って筵敷きの店を出していたが、黒い影が鋭く人々の間に飛び込んだ勢いと突風に驚いて、叫び声をあげた。

「なんだい、なんだい、一体エ！」

「ああ、鳥だ。鳥だよ」

「何かエサでも見つけたかねえ。ああ、びつくりした」

「アア、驚いて胸が切ないヨ」

黒い影が今度はゆつくりとばさ、ばさ、と羽ばたきながら飛んで行くのを見て、橋の上に居た人々が言いあう。小鬼もびつくりして、鳥の飛んで行った方をポカンと見ている。

「あっ！」

童子の声で我に返ると、自分たちがすっかり抱えていたはずの摩尼珠がなかった。

「ややや！」

「きらきら、ないない」

「鳥じゃ。やられたな」

童子が飛び去って行った尾羽が荒れた鳥を指差す。遠目ではあったが、足元できらりと光が跳ね返った。小鬼たちは駆け出す。茂吉の大事な摩尼珠だ。取り返さなければ。

「鳥め！」

「烏め！」

ようやく追いついたと思うと、烏はまたしても裏木戸の入り口に立つ木戸の上に止まって、くあー、と小鬼をバカにしたように鳴いた。小鬼たちはキイキイと烏を見上げて文句を言う。

そこへさりさりと草履の音が近づいてきた。みれば、茂吉だ。烏も小鬼たちも元の長屋へ戻って来ていたのだ。

「小童！ これはな！」

「わっば、烏！ 烏！」

小鬼が言い訳ともつかぬ言葉を言う。茂吉は判っている、と言うように頷くと、木戸の上の烏をじっと見た。烏は今までバカにしたように鳴いていたのが、茂吉の視線に射すくめられたように急に大人しくなった。

すい、と茂吉が手を烏の方へ差し出した。

烏は、あー、くあーと今度は弱気な声で鳴くと、摩尼珠を持ったまま茂吉の方へ飛んで行き、差し出した手の上に摩尼珠を戻す。そして腕に止まると申し訳なさそうに頭を下げた。

茂吉はその頭をこりこりと搔いてやった。

「小童！ 戻ったな」

「戻った、戻った」

小鬼はもぞもぞと茂吉の身体を這い上がると、懐の中に入り込んだ。茂吉はにっこり笑って、懐をぼんぼん、と優しく叩く。茂吉の手に戻った摩尼珠が、きらりと橙の光を弾いた。

—
了

0327# エアブー HARU2022

寝床屋の無料配布

2022/03/27 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

今回は、良く漫画である誰も喋らない展開が
書きたかったのですが、小説でそれをやるのは
難しかった……。

ともあれ、自分でもお気に入りの小鬼たちを
出せたので、大変に満足です。
(これは時代小説……なのか?)

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。